神戸新聞 2016年09月29日 木曜日 面名 朝一社 １４ 31ページ

全盲者、駅に潜む危険

命の扉 問われる安全社会 ①

生死直結 線路への転落

欄干なき橋

ＪＲ住吉駅のホームを白杖をついて歩く桂田元太郎さん。「どんな人も安全な移動が許容される社会であってほしい」＝神戸市東灘区住吉本町１（撮影・笠原次郎）

考え事をしながら、駅のホームを歩いていた。線路に沿って端に黄色い点字ブロックが並んでいる。その手前で電車を待っていたつもりが、ブロックをまたいでいた。もし、そのまま線路側へと進んでいたら―。

全盲の日本ブラインドテニス連盟会長、桂田元太郎さん(45)＝神戸市灘区＝は、そんな危うい経験を何度もしている。

そう、あの日も。

□

2005年7月20日夕。桂田さんは大阪府東大阪市の勤務先を出て、長男を預ける保育所に向かっていた。最寄りの近鉄河内小阪駅ホームに電車が着くと、白杖を前に出し、左右に振った。広い空間。「扉が開いている」と思い、前へ踏み出した。

が、足は空を切る。扉はなく、電車の先頭部同士が向き合った連結部分だった。この駅には転落を防ぐホームドアはなかった。

「人が落ちた！」。女性客が声を上げる。だが、電車は動きだした。桂田さんの体が引きずられていく。「あかん、間に合わへん！」。男性客が叫んだ。

数人がかりで助け出され、九死に一生を得たが、背骨と右太ももの骨を折る重傷を負った。2カ月間の入院、リハビリが続いた。

身近な駅に潜む危険は生死に直結する。だが命を守る扉の設置は遅々として進まない。

11年1月には、桂田さんの知人で全盲の武井視良さん＝当時(42)＝が、東京のＪＲ山手線目白駅のホームから転落し、電車にはねられ亡くなった。

武井さんは、桂田さんが転落事故で入院中、見舞いに訪れた。

「生きていてくれてよかった。お互い、気をつけような」。そう励ましてくれた武井さんが世を去った。

目白駅にはその後、ホームドアが設置された。命が失われてからでは遅い。桂田さんはほぞをかむ。

□

全盲で鍼灸マッサージ師の佐々木文孝さん(49)＝神戸市垂水区＝は昨年5月、阪神電鉄神戸三宮駅のホームから転落した。地下で電車が来る音が反響し合ったため、線路との距離をつかみ損ね、乗車とは別の線路に落ちた。大けがをした。

駅のホームは、障害者から「欄干なき橋」と危険視される。ただ障害の有無にかかわらず、人は時に油断したり注意が散漫になったりする。「だから命を落としてもいい、とはならない」と話す桂田さんの願いは切実だ。

「乗客の安全を守るために配慮と努力を重ねることは法律以前の問題。鉄道会社は悲しみを生まない努力を」

きょうもどこかで、「欄干なき橋」を命懸けで渡る人がいる。

（藤村有希子）

■

東京の地下鉄駅で8月、盲導犬を連れていた目の不自由な男性がホームから転落、電車にはねられ死亡した事故の衝撃が広がっている。健常者の転落や電車との接触も後を絶たない。なぜ、ホームドアの設置が進まないのか。実情を取材した。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

名 前【　　】

① 全盲の桂田さんが2005年7月20日夕に電車に乗ろうと、白杖を前に出し左右に振ったら、広い空間があったので、「扉が開いている」と思い、前に踏み出したのですが、そこはどこだったのですか？

（　　）

② 見出しの「欄干なき橋」とは、何のことですか？

（　　）

③ 記事を読んでどう思いましたか。事故を防ぐために、私たちができることはどのようなことでしょうか。

NIEワークシート／小学高学年～高校生／道徳、総合、LHR、朝NIE